

## 将来について考える

私は中学校3年生になってからの1年間、ほとんど学校に行っていない。「なんで学校に来んの？」と友達に聞かれても、うまく答えることができません。私はずっと家にこもりがちで、将来やりたいことも見つからず、時間だけが過ぎていく日々でした。

冬になり、高校受験の時期が近づいても、どうしようかと悩むだけで、答えは見つかりません。そんな時、ボーイズリーグの監督から「上浮穴高校を受けてみないか。」と言われました。私の家は伊予郡松前町にあるため、初めはどこにある高校かも知りませんでした。しかし、「高校で野球をしたい。」という気持ちと、「自分で新しい道を切り開きたい。」という思いで、上浮穴高校森林環境科を受験しました。

あれからもう2年が過ぎようとしていますが、今はすっかり一人暮らしにも慣れ、毎日充実した日々を過ごしています。あの頃の私と比べれば、随分成長したなど感じますが、今度は次の進路について考えなければなりません。そこで、私が考える自分の将来について話したいと思います。

まず、1つ目は農業をやりたいということです。私が上浮穴高校の普通科ではなく、森林環境科を選んだのには祖父母の存在があります。祖父母は実家のすぐ隣りに住んでいて、50年以上も前から青ネギの通年栽培を行っている専業農家です。他にもいろんな種類の野菜を作っていて、家で食べる野菜のほとんどが祖父母の畑で採れたものです。そんな環境で育った私は、自然と農業に親しみを感じていました。

高校に入り、授業で実際に野菜を育ててか

らは農業により興味を持つようになりました。特に生物活用の授業では、一人一人に小さな畑が割り当てられ、自分で栽培計画を立て、エダマメ、トマト、ホウレンソウを育てました。農業は作る物によって、植え方や育て方が異なります。季節や気候に合った物を作る必要がありますが、いい物を作るためには、それだけ手をかけてやらないといけません。その一つ一つをクリアしていくことは、大変なことだと思います。でも、これが農業の良いところだとも思います。自分の手で様々な苦勞をし、成長する姿を間近で見ていると、まるでこれまでの自分自身を見ているように思いました。

2つ目は、林業もやりたいということです。森林環境科では1年生の時から林業について学びますが、最初は全く興味が持てませんでした。夏休みに行われた林業インターンシップでは、実際にチェーンソーを使って伐倒作業を行いました。腕は痛いし、汗はびっしょり、林業なんて絶対やりたくないと思いました。しかし、林業機械の操作体験の時だけは気持ちが180度変わりました。グラップル、フォワーダ、ハーベスタと3種類の林業機械にりましたが、中でもハーベスタを操作した時は感動でした。さっきまで苦勞して造材していた1本の木が、レバー1つでいとも簡単に扱え、とても爽快で楽しく感じました。林業は命を落とすこともある危険な仕事ですが、今は機械化が進み、安全で効率的な仕事であることも分かり、すごく貴重な体験ができました。また、林業が農業と違うところは、1本の木を育てるのに何十年もかかることです。ずーっと先の将来のことを見据え、植えたり、切ったり、又は途中で間伐も必要です。その

ようなことを考えていると、林業は将来のことをしっかりと考えないとできない仕事だと感じました。

農業と林業。どちらも高齢化や、後継者不足などを要因として、着実に人口が減っている職業です。「農業や林業は大変だ。」というイメージが強いようですが、大変だからこそ喜びや楽しみも多いのだと思います。

話は少し変わりますが、本校の野球部は部員数が少ないため、私は投手・野手に関係なく、複数のポジションを守らないといけません。練習は大変ですが、いろんな立場で物事を考えることができ、試合に勝った時の喜びはとても大きいです。そこで、私は1つの職業にこだわるのではなく、農業と林業の複合経営をしたいと考えています。実際、久万高原町では、農業と林業の両方で生活している人が多いことを学びましたが、私の場合は少し違います。具体的には、祖父母の所有する畑を引き継ぎ、現在周年栽培している青ネギの栽培期間を春から夏までに短縮します。そして、それ以外の期間は通勤林業という形で久万高原町に通うのです。林業については、資格と技術さえ身に付けていれば必要としてくれる会社があると思います。

このように高校での様々な体験から、農業や林業を将来の仕事にしたいという気持ちはあります。しかし、実際祖父母はまだまだ元気ですし、今の私を都合良く雇ってくれる会社も無いでしょう。担任の先生からは、将来を見据え、農業関係の進学や林業会社に就職することも勧められましたが、今は中学生の時の私ではありません。

最後に3つ目の考えとして、今、私の心には、「もっと野球を続けたい。」「もっといろ

んな経験をしたい。」という想いがあります。だから、卒業後は大学に進学しようと思うのです。農業や林業に対する思いを捨てるわけではありませんが、より人生経験を積んだ上で将来について考え、そしていずれは立派な大木になれるよう頑張ります。

H30年度卒業生  
進路先：聖カタリナ大学

森林土木技術者を目指して

「上高に行くなら、携帯代、払ってあげらい」滑り止めの私立高校へは合格していたものの、県立の志望を決めかねていた私は、親から言われたこの一言で、上浮穴高校への進学を決めました。高校に入って特にやりたいこともなく、森林環境科を選んだのも、「授業を受けるぐらいなら、実習の方がいいか」という、軽い気持ちからでした。

入学してからの私を待っていたのは、予想通りの退屈な日々。なんとなく入部した部活動もさぼりがちになり、挙げ句の果てには生徒課の先生にお世話になる始末。今考えると、本当にどうしようもない学校生活を送っていました。そんな私に転機が訪れたのは、当時2つ上の先輩が、測量士補に合格したという話を聞いた時でした。その先輩は、1年生の時には測量競技の全国大会で優秀賞を受賞しており、3年最後の測量競技は残念ながら県大会止まりだったこと、けれど測量競技をきっかけに測量士補に興味を持ち、勉強したとのことでした。その先輩からは「全国大会は楽しい。授業サボって県外に行けるし、修学旅行みたいよ」と、話してくれました。その時、「どうせつまらない高校生活なら全国大会に行って、授業をさぼってやろう。」そう思った私は、とりあえず仲間を集め、測量競技の練習を始めました。

しかし、今までの自分の態度のせいか、測量の顧問の先生は「とりあえずビデオ見て。あとは先輩から教えてもらって。」と、あまり相手にしてくれません。それでも全国大会に行きたいという思いで練習を重ねました。学年も一つあがり、測量競技が近づくに

つれ練習にも熱が入り、1つ上の先輩達よりも、多くの練習を重ねました。そして迎えた大会当日。とんでもないことが起こりました。それは、雷注意報の発令。外はほぼ快晴、グラウンドでは野球部が練習しているにもかかわらず、競技は屋内で、雨天時の内容で行われたのです。顧問の先生からはないがしろにされ、雨天用の競技は何一つ教えてもらっていませんでした。まさにお手上げ状態。結局、雨天用の練習をしっかりとやっていた、うちの学校の先輩が最優秀となりました。雷注意報さえでなければ、自分達が最優秀だったかもしれない…。そんな悔しさがこみ上げてきました。悔しさの中、「測量競技で全国大会に行けなかったら、何も残らない。やって意味のあることを、就職に有利になるような資格をとりたい。」そう思うようになっていました。

夏休みが明けたとき、廊下で測量の顧問の先生を呼び止め、思い切って切り出しました。「測量士補を教えてください。」先生は少し驚いたような顔でこういいました。「教えることはできるけど、なにも言われなくても勉強できる力がないと合格しない。放課後は、毎日残って勉強できるか？」私は、「やります」と即答しました。その日から、放課後は毎日残って勉強し、先生からは容赦ない宿題を出され、「まじか」ということもありましたが、測量士補に合格するという目標ができ、高校生活が充実してきたのを感じました。

そんな中、森林環境科の実習で林業実技研修が行われました。これは、林業研究センターの協力のもと、チェーンソー技術の習得を中心に、林業の基礎を教えてもらえる実習です。私が一番面白いと感じたのは、高

性能林業機械の操作を体験したことでした。普段は触れることのできない重機を使っ  
ての作業は、とても刺激的なものでした。しかし、同時に、高性能林業機械の問題点も見え  
てきました。それは、機械があまりにも大き  
すぎる。日本の森林は急傾斜で、林道の  
整備が遅れています。いくら機械化が進ん  
でも、山の中に入れないのでは意味があり  
ません。その時、思いました。今勉強してい  
る測量の技術は、きっと林業にも役に立つ。  
測量士補の資格を取って、将来は森林土木  
技術者になろう。そして、林業の専門職とし  
て役場に入り、高性能林業機械が入れるよ  
うな林道を設計し、地域林業の役に立ちた  
い。「携帯代」「授業をさぼる」「就職に有利」  
の不純な動機が、「全国大会出場」「測量士補  
合格」「将来の夢」へと、大きな目標に変化  
した瞬間でした。

私は今、この3つの目標に向けて一つ一  
つ努力を続けています。測量競技で全国大  
会出場を目指し、日々練習をしながら、測量  
士補の課題をこなし、課題研究では学校林  
の作業道整備を行っています。本校には、町  
から委託された森林がありますが、現在、そ  
の森林に続く作業道が土砂崩れを起こして  
しまい、林内作業車が入れなくなっていて、  
改めて、作業道の必要性を痛感しています。  
重機が入れるわけではなく、作業はほとん  
ど手作業ですが、卒業までには何とか完成  
させたいと思っています。

そして先日、測量士補の合格発表があり、  
ワクワクしながら国土地理院のホームペー  
ジを開くと、そこには自分の受験番号が記  
載されていました。今までにない達成感を  
覚えると同時に、次の目標に向かって頑張  
ろうという、やる気が満ちあふれました。

1つの目標が達成できた今、残るは後2つ。  
雷に負けないよう、しっかりと練習し、全国  
大会出場、そして、上浮穴高校で学んだこと  
を胸に、りっぱな技術者になります！

H29年度卒業生

進路先：久万高原町役場（就職）

## 農業と私 ～出会い、癒し、夢～

私は、自他ともに認める飽き性です。好きになったことも、長くて3か月もすれば飽きてしまいます。私のこの飽き性な性格は幼い時からで、好きになっても飽きるというのを繰り返していると、次第に私の癒しといえる物がなくなっていきました。

高校に入学すると、周りの友達は自分のやりたいことを見つけ、充実した高校生活を過ごしている。そんな様子を見てみると、やりたいこともなく、ストレスを発散できない自分の精神がだんだん弱っていくのを感じていました。それから悪循環が続き、2学期になると、とうとう私の精神が壊れ入院。退院後も学校に行ける状態ではなく、休学することになりました。家で生活している間も私の精神が完全に治ることはなく、一生このままなんだろうと不安が募る毎日でした。休学から1年と半年が過ぎた頃、妹が私と同じ森林環境科へ入学するのを機に、私は復学しました。再び始まった高校生活、休むことも度々ありましたが、なんとか1年生の過程を終えることができました。しかし、心の癒しを見つけることはできていません。特に農業は、癒しとはほど遠いものだと思っていました。

私は、農業系の学科を選んだにも関わらず、農業の楽しさや魅力が分かっていませんでした。1年生の頃は、自分のことで精一杯で、他のことに目を向ける余裕はありませんでしたが、2年生になり、農業の授業が増え、私の農業に対する考え方が少しずつ変わっていきました。生物活用の授業では、小さな圃場を割り当てられ、自分が作りたい野菜を育てる実習をしました。放

課後も水やりで時間が削られてしまうことが嫌で、早く家に帰りたい私にとっては苦痛でした。そんなある日、授業で野菜の手入れをする時間がありました。すると、その時まで何とも思っていなかった野菜たちが、着実に大きくなっていることに初めて気付きました。「草引きは授業の時しかやってないし、肥料だってやってないのにちゃんと育ってる。ちゃんと世話したらもっと大きく、立派に育つのかも」と思い、それからは自分の育てる野菜に対し、真剣に取り組むようになりました。

「レタスやキャベツには、虫がつかないようにしないといけないなあ。」とか、学校を休んだ日には、「水やりしなくて大丈夫かなあ。」と不安になりました。こうしてだんだん畑に向かうのが楽しみになりました。そして、いよいよ収穫。家で食べた時には、達成感でいっぱいでした。マラソンではよく、ゴールした時の達成感がすごいと聞きますが、走り切ったという実感だけで、実物となって残らないので私は好きになれません。しかし、野菜は実物となって残ります。最終的には食べてなくなりますが、おいしいと感じることで嬉しさが増します。それが自分で作った野菜であればなおさらです。私はこの喜びや楽しさが忘れられず、家でも野菜を育てることにしました。分らないことも多く、試行錯誤することもありましたが、学校で作った時よりも順調に育ち、母や妹たちも一緒になって喜んでくれました。

3年生になってからは、家で花も育てることにしました。今までにも花を育てたことはありましたが、気が付けば枯れていて、楽しめるのは一瞬のことだと思ってい

ました。しかし、毎日ちゃんとお世話をしていたら2か月くらい綺麗な状態で咲き続けてくれました。花は野菜と違って食べることは出来ませんが、野菜と違う魅力があります。それは毎日花を見ていると分かります。心が癒され、その時だけは不安や悩みが消えていくようで、私は花も好きになりました。また、学校の実習では苔玉づくりや多肉植物の寄せ植えにも取り組みました。使用する植物は、管理が簡単な上、寿命も長く、さらには自分好みにアレンジすることができます。私も妹もすっかりはまってしまい、今では家中にたくさんの植物が飾られています。

授業では、園芸セラピーが医学的に良いことを学習しましたが、最初は何がそんなに良いのか分かりませんでした。しかし、私は実際に野菜や花を育てる喜びを知ったことで、徐々に元気を取り戻すことが出来ました。植物を育てることで、心の中の何かが変わり始めたことを、身を持って体験できたと感じています。

今では、地域資源を活用したクロモジの研究にも取り組むようになり、農業の魅力を多くの人に発信する大切さを実感しています。そして、今までは将来に不安をおぼえ、何も考えることが出来なかった私にとって、大きな夢ができました。それは「もっと農業について学び、農業の良さを伝えたい。」ということです。私は、この春から農業大学校に進学しますが、いずれは大学へ編入し、教員免許を取り、教壇に立ちたいと思っています。もしも、森林環境科に入って農業に出会わなかったら、もしも、心を閉ざし、悩み続けた1年半がなければ、私の永遠の癒しは見つからなかった

と思います。農業＝夢を実現させるために、これからも頑張ります。

H30年度卒業生  
進路先：愛媛県立農業大学校

## 私の「なりわい」

「あれ？入野フェスティバル出れんやん。」

手帳をめくりながら、何度見直してもやっぱり同じ日付。出演依頼のあった「全国ハーブフェスティバル」と、毎年参加している「入野フェスティバル」。「どちらもでたい」と思うと同時に、「おなじ町内のイベントなのに、なんでこんなことになるんだろう」という気持ちが、沸々とわいてきました。

私は中学生の頃、地元の久万高原町で農業を営みながら、カフェを経営したいという夢がありました。そこで、地元で農林業について勉強できる、上浮穴高校森林環境科に入学し、そこで出会ったのが、カホンという打楽器を使ったプロジェクト活動です。町内の小学校へ訪れ、一緒にカホンを作ったり演奏したりして、地域資源である木材や森林について興味を持ってもらう活動を中心に、くま町ひな祭りや林業まつり、愛媛FCホームゲームやFM愛媛のイベントなど町内外のイベントで、演奏したり、活動を紹介する機会も増えました。そんな中持ち上がった問題が、「イベントのブッキング」でした。例年参加している地区のイベントである「入野フェスティバル」と、本年度開催された全国規模の「ハーブフェスティバル」の開催日が重なっていたのです。最終的に、事前に出演依頼のあった「ハーブフェスティバル」に参加することとなり、オープニングイベントでの演奏は大変好評でした。しかし私は、「これでは久万高原町の活性化には繋がらないんじゃないか」と思うようになってしまし

た。

プロジェクト活動を通して、様々なイベントに参加するようになり、確かに、一つ一つのイベントはとても盛り上がっていると感じます。しかし、個々の団体がばらばらに、それぞれのことをやっているだけで、他の団体とのつながりがなく、今回のような問題が起きています。数年前、大きな道の駅ができ、時を同じくして、商工会が中心となり、商店街での軽トラ市も始まりました。そのおかげか、観光客も増加傾向にあります。しかし、道の駅と軽トラ市には何のつながりもありません。「地域を活性化させよう」という気持ちは同じですが、久万高原町が一体となっていないかぎり、本当の意味で、「活性化できた」とは言い難いと思うのです。

そんな私の転機となったのが、聞き書き甲子園への参加です。聞き書き甲子園では、香川県綾歌町で造林手の田中さんに聞き書きをさせていただきました。田中さんは綾上セブンクラブという林業研究会のコミュニティを作り、毎月林業を専門とする普及員をよんで講習会を開いたりしていたそうです。このセブンクラブは県知事賞を取るほどになり、地域活性化の中心となっていました。田中さんの「この辺でセブンクラブいうたら、知らんやつはおらんわ」と嬉しそうに語る顔は今でも忘れられません。「地道に活動しながら仲間を増やし、時にはリーダーとして、地域一体となって活性化に取り組む」その大切さを感じました。

また、岡山県で開催された「真庭なりわい塾」の講演会に参加し、私はさらなる衝撃を受けました。真庭なりわい塾は「暮ら

しを作る力」「なりわいを創造する力」「地域を支える力」「志を共にする仲間作り」を身につけ、新しい「なりわい」のカタチを創造する取り組みです。なかでも、中和地域でカフェ「蒜山耕藝くど」を営業している高谷さんのなりわいに私は興味を持ちました。高谷さんは千葉県から中和地区に移住してきて、「食べたいものをつくる」というコンセプトの元、農業法人を立ち上げ、そこでとれた食材を使ったカフェを経営、仲間達とのつながりを大切にしたりわいをされています。私の中学時代の夢が現実になったような、理想の姿がそこにあり、私は感動すると同時にとても勇気づけられました。また、行政やNPO、小中学校や一般企業、地域おこし協力隊、農家など、立場や職業を超え、それぞれが講師となり、時には塾生となり、まさに地域一体となって地元について学び、活性化に取り組んでいる姿を目の当たりにし、「これが本当の地域活性化だ」と感じました。

真庭なりわい塾はもちろん、聞き書きでお世話になった田中さんも、人と人をつなげ、自分たちの地元を学び、そこに住む人々が一体となって取り組んでいるからこそ、地域が活性化されているのです。今、久万高原町に足りないのは「地域の一体感とそれをマネジメントし、導いていくリーダー」なのです。私は久万高原町でもそんなコミュニティを作りたい、そう思うようになりました！

そのために今、私が力を入れているのが「地元を学ぶ」ことです。久万高原町で開催された「生き方創造塾」に参加し、ワークショップを通して地元について学び、地元の魅力を再発見しています。

中学時代からの夢だったカフェの経営。でも、それだけでは足りないことを、高校生活で学びました。地域資源である、地元産の野菜を栽培して、木材をふんだんに取り入れたカフェを経営しながら、そこにつどう、何よりも大切な地域資源である、人と人をつなげ、久万高原町を活性化するコミュニティを作ること、地域をマネジメントしていくことが、今の私の夢、私のなりわいです！

H28 年度卒業生  
進路先：愛媛大学社会共創学部



## 木を見て森を見る

家や家具、食器に小物。それらの商品を買うとき、みなさんは何を基準に選んでいますか？値段やデザイン、機能性はもちろん、材質も基準にする人は少なくないと思います。みなさんがものを買うときの基準、そのなかに「木でできた」という基準は入っているでしょうか？そして、もう1歩踏み込んで、「森林からできた」と考える人はいったいどのくらいいるでしょうか？

私が、木や森林について意識するようになったのは、3年間の学習を通して得た、3つの経験からです。

一つ目が、2年生の冬に行った林業実技研修です。毎週月曜日、合計4回行われ、森林の密度調査やチェーンソーを使つての伐採、高性能林業機械の操作など、林業の基礎をみっちり教えてもらえるものでした。私が一番印象に残っているのは、その作業を行う際に着た、防護服です。普段学校で使用している防護服はチャップスと呼ばれ、オーバーオールのような見目をしています。白いヘルメットをかぶったその姿はさながら、土管から出てきたマリオ。お世辞にもかっこいいとは言えません。しかし、この研修で使用した防護服は、上下がセパレートタイプになっており、遠くからよく見えるように赤で統一され、耳当てが内蔵されたヘルメットも、あわせてコーディネートされていました。まるで、映画やアニメのヒーローのような防護服で、素直に「かっこいい」と思えるものでした。もちろん、機能性も申し分なく、チェーンソーの刃が触れても、人の肌までは到達し

ないように作られています。講師の方が「林業はダサイというイメージをもたれることがあります。見た目だけ、ではだめですが、この防護服は見た目も、機能的にも、今までのイメージよりずっとかっこよくなっています。」と話されたのを聞き、あるTV番組を思い出しました。その番組は林業先進国であるドイツの森林や林業について紹介するもので、ドイツの森林官という職業がクローズアップされていました。将来なりたい職業についてのアンケート結果で、森林官が、医者に並んでトップ3に入るほど人気だったというのです。その森林官が着ていたのが、私たちも使用した防護服でした。見た目のインパクトも大きく子ども達に「かっこいい」と思ってもらえること、そしてテレビやメディアで実際にチェーンソーを使った実演をし、国民全員に知ってもらおうということが森林官の地位を高めている一つの要因になっているそうです。日本にも他の国に自慢できる素晴らしい木や森林があり、林業があるからこそ、木材を利用できるのに、それを扱う林業の仕事の大切さがあまり知られていないのは、アピール不足もあるのではないかと思います。

2つ目に印象に残っている実習が、先進地林業見学です。これも、2年生の冬に行われました。岡山県と香川県を回り、日本でも有数の林業地帯を見学しました。その中で印象に残っているのが、ジョージナカシマ記念館です。ジョージナカシマは、米国籍の日系2世の家具作家です。はじめは、イス1脚が何十万もすることに驚いていましたが、記念館のパネルにあった「ジョージナカシマは、自然と木を愛し続けた

人でした。その木の生きてきた長い年月を思い、木を生かす次の場所を見つける一家具を作るとき、ナカシマは木と対話しながら、いつもそう心掛けていました」という言葉に目がとまりました。家具を作るためには、木を切らなければならない。けれどジョージは自然を壊すのではなく、木と対話し、木に新しい命を吹き込む。そして家具づくりを通して人と木を、人と森林とをつなげていたのです。改めて展示された作品を見てみると、美しくデザインされたイスの向こうに、広大な森林の息づかいが感じられるような、不思議な気持ちになりました。

3つ目に印象に残っているのが、3年間通して活動してきた、木材利用啓発のプロジェクト活動です。ペルー発祥のカホンという打楽器を、地元の木材を使って製作し、小学校や地域のイベントなどで演奏したり、一緒に作ってもらったりしながら、木や森林についての環境教育を行ってきました。実際に木材に触れ、その温かみや優しさを感じてもらいながら、カホンを作る。できたカホンをみんなで演奏し、活動を共有する。参加者から「かっこいい」と言ってくれたときは、恥ずかしいような嬉しいような気持ちになりました。そして、活動の最後には必ず言う言葉があります。

「今日作ったカホンを見るたびに、木のことを思い出して、森林のことを思い出してください。そして、何かを買うときに、ちょっと手を止め、木材でできたものを買ってくれたら、この活動は大成功です。」

林業は今、厳しい現状です。しかし、林業のかっこよさや大切さをきちんとアピールすること。人々にとって身近な家具や小

物を通して、林業や森林について考えてもらうこと。木を見ることから始まって、森林を見てもらうこと。小さなことかもしれませんが、それが日本の林業を救う、大切な1歩になるのだと、3年間の活動を通して思うようになりました。一人一人が、木材製品を手にとることで、森林に1歩近づくのです。みなさんも、目の前の木から、森林に、思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

H28年度卒業生

進路先：高知職業能力開発短期大学校

## 森のハーバルライフ

ハーブというと皆さんは何を連想しますか。いい香りがする花を思い浮かべるかもしれませんが、ハーブとは香りだけでなく、薬効などのある植物もさし、森林の樹木もハーブの一つと言えます。そもそも樹木の香りはフィトンチッドといって昆虫や病原菌などの外敵から自分を守るために発散される揮発性物質で、それが私たち人間にとっては安らぎや健康増進につながるという効果があるのです。そこで、私たちの生活に木の香りを積極的に取り入れていくことを「森のハーバルライフ」といい、そのテーマで昨年5月28・29日に久万高原町で全国ハーブサミットが開催されました。

森林の香りといえばヒノキやスギが一般的ですが、久万高原町では昔から神経痛に効くお茶として知られていたクロモジに着目し、地域資源としての開発を、上浮穴高校と地元森林組合とで共同研究を行うことになりました。クロモジには癒しの木と言われるぐらい甘く落ち着いた香りと、抗菌・殺菌効果などの優れた薬効があり、クロモジから採れるアロマオイルは1ml2000円で販売されています。しかし、林業家にとって採取量や流通量の少ないクロモジは価値のない森林伐採後に残る林地残材としか見ていませんでした。

私は課題研究のテーマとして4人の仲間とクロモジの研究を始めました。まず、5月のハーブサミットで精油の実演と研究成果を報告するために、アロマオイルの精製とアロマオイル入り石けんの商品化に取り組みました。用意したアロマオイルや石け

んは2時間ほどで完売しましたが、今まで自分から何かをするという経験がなかった私は、今思えば石けんのラッピングも適当で、売れなかったらどうしようとか、どうすれば売れるのかという意識はなかったように思います。また、クロモジについて質問があっても先生から教えてもらったことだけしか答えることができず、伝えることの難しさを身をもって思い知らされました。しかし、その時アンケートに答えていただいた方からは、アロマはこれからどんどん注目されると思いますので頑張ってくださいといった激励の言葉をたくさんいただき、自信を持つことができました。

そして、2ヶ月後、期待を込めて望んだ町内のイベント「くまくるマルシェ」でアロマオイルや石けんを販売しました。しかし、7月下旬ということもあって観光客は少なく、地元の人は何を売っているんだと、横目で見て通り過ぎる有様で、予想とは裏腹にまったくといっていいほど売れませんでした。その時思いました。ハーブサミットではハーブに興味がある人がいたから売れたんだと……。クロモジの知名度はまだまだ低いんだなと……。

そこで思いました。お客さんを待つて物を売るだけじゃだめだ……。自分たちで何か企画をしないと。

そこで、「森のハーバルライフ」というテーマをもう一度考えることにしました。森のハーブを私たちの生活に取り入れるとはどういうことなのか。そうか、今自分たちがやっていることが「森のハーバルライフ」じゃないのか。だったら、一般の方と山林でクロモジを採取してアロマオイルを蒸留し、そのオイルを使って石けんも作っ

てみてはどうかと・・・。

8月に第1回クロモジ体験ツアーを企画したところ19名の参加者がありました。参加者には、クロモジの香りを、山の伐採、木材粉碎機、水蒸気蒸留、石けん作りの計4回を楽しんでいただき、大満足をしていただきました。歯車が噛み合いますとはこのことで、一か月後、この様子と私たちの取り組みについて「ふるさと絶賛バラエティー一よ」で約10分程度のテレビ放送がありました。

その後、10月の第2回クロモジ体験ツアーには15名の参加があり、これも大盛況で、地域イベントの久万林業祭りや、本校文化祭では「テレビを見たよ」といって、アロマオイルの蒸留実演、販売、石けんづくり体験などに興味を示してくれる人が増え、中にはクロモジのアロマオイルを使ってマッサージに活用し、地元で起業したいという方も現れました。

さらに11月にはえひめ地域づくり研究会に久万高原町で中予地区ミニフォーラムを開催していただき、「上高生のクロモジ商品化による地域活性化」というタイトルで発表とパネルディスカッションを行うことができ、小さな活動がいよいよ地域を巻き込んで大きくなっていると実感しています。

私たちに商品化の事やイベントの企画などで協力してくれているジャパンハーブソサエティー理事の井上さんやクロモジの伐採や特性について教えていただいている森林組合活性化センター長の梶川さんは、「高校生が頑張っているからみんなが応援してくれるんよ」とよく言ってくれます。私はこの活動をやっていくうちに、久万高

原町を誇りに思い、これからも住み続けたいと思うようになりました。

高校卒業後は、将来、介護福祉士になるために進学します。最近、香りと脳の活性化についての研究成果が医学的に立証されるようになりました。香りは記憶に直接つながる海馬に影響されるとされ、痴呆症などの治療に役立つのではないかとされています。将来はこの研究活動で得た経験と久万高原町のクロモジを老人介護の分野に取り入れ、ふるさとのために頑張りたいと思います。

H28年度卒業生  
進路先：聖カタリナ大学

## 森の想いをつなげて・広げて

「はよ帰りたいなー。」

これは、私が1年生の時、いつも考えていたことです。友達から、「一緒に入ろや」といわれて、何となく始めたプロジェクト活動。放課後、遅くまで残り、紙ヤスリで木材を磨くという地味な作業。「なんでこんなことしよんやろ。めんどくさいなあ。Mステ見れんやん。」それが、あの時の本音でした。

私が今取り組んでいる、このプロジェクト活動は、カホンという打楽器を、愛媛県産の木材で製作し、ワークショップを通じて、日本の森林や木材について興味を持ってもらおうというものです。先輩達からの活動を引き継ぎ、今年で5年目となりました。1年生の頃は、先輩のお手伝いや裏方の仕事が多く、自分がやっている、というより、やらされている、という気持ちが多かったように思います。それでも、愛媛FCでのカホン製作イベントで、100個のカホンを製作したり、7000人を超える観客を前に演奏する、先輩達の姿を見たことや、他にも色々なイベントに引っ張りだこの先輩達を見ていると、「先輩達はすごいなあ、自分もあんな風になれるのかな。」と思うようになっていました。

3年間取り組んできたこの活動で、一番印象に残っているのが、幼稚園から高校生までの43名を相手に、カホン製作のワークショップを行ったときでした。この時は、先輩達が卒業して初めて、自分たちだけで行ったので、よく覚えています。このワークショップには、一つの流れがあります。まず、自己紹介をして、カホンを製作

します。そのあと、森林や木材に関するクイズをしながら、参加者のみなさんに、森林について考えてもらいます。そして、最後は自分で作ったカホンで演奏する、これまで、先輩達が何度も見せてくれていたことでした。けれど、今までは先輩達の指示を聞き、お手伝いをするだけでよかったのに、今は自分が考えて参加者に指示を出し、カホンを作ったり、演奏をしたりしないといけません。なんとか無事にワークショップが終了し、参加者を見送ったあとの私は、すっかり疲れきってしまいました。けれど、先輩達が、なぜあんなにイキイキと活動していたのか、分かったような気がしました。「放課後遅くまで残って準備するのは大変。だけど、自分達が中心になると、大変だけど、楽しいし、参加してくれたみんなが、笑顔でありがとうと言ってくれるのは、本当にうれしい。」そう思うと同時に、1年生の時の活動を、雑にやっていたことを申し訳なく思う自分がいました。先輩たちが頑張ってきてきたことをちゃんと続けないと、先輩たちに顔向けができない、と思うようになったのです。この体験を機に、私は、今までより熱心に活動に取り組むようになりました。

それからは、町内外を問わず、色々なところで演奏やワークショップを行ってきました。中でも、一番大きなイベントになったのが、私たちが企画して、FM愛媛と、久万造林株式会社とコラボして実施した、森フェス2017です。「森のことを伝える活動だから、森の中で演奏できたらいいね」と提案してくれた参加者がいて、イベントステージとなる森林を久万造林さんが、イベントに必要な資材と、当日に歌っ

てもらった歌手の手配を、FM愛媛さんが行ってくれることになり、このイベントが実現しました。このイベントを成功させるために、材料やステージを準備したり、告知のためにラジオに生出演したりと、大忙しでした。当日は、残念ながら、台風直撃の荒天。けれど、奇跡的に暴風警報は発令されず、上浮穴高校の、伝統ある木造の講堂である、知今堂で開催することができました。台風にもかかわらず、多くの人に参加してもらい、予定通りイベントを実施できたことは、大きな自信になると同時に、「来年こそは、絶対、森のステージで！」との思いを強くしてくれました。

私が、この活動を通して得たものが2つあります。それは、繋がりと広がりです。テレビやラジオの取材や、コラボレーションを通して、普段関わることのできない方々と繋がり、一緒に活動することができました。森フェスでは、シンガーソングライターのコトノさん、エミフルで行なったイベントでは、Mステ出演経験のある、ジャパハリネットの中岡さん、と言った、その道のプロとの繋がりができました。私のカホンには、多くのサインを頂いていて、サインの数々は、私のつながりを証明してくれる財産です。

そして、活動の広がりも感じています。これまでに製作したカホンの個数は、700個を優に超え、もうすぐ800個になります。保育園児から70歳を超える高齢者まで、本当に色々な人たちと、カホンを製作してきました。今では、色々なところからワークショップの依頼が舞い込んできます。この800個のうち、私が製作に関わったのは400個以上、振り返れば、活動

の半分以上を担ってきた計算になります。始めは「面倒だな」と思っていた活動でしたが、今では、自信を持って活動することができるようになりました。先輩たちから引き継いだ、「カホンを通じて、森林について興味を持って欲しい」という思いを、多くの人に広げることができた、いや、自分たちが広げているんだ、という実感があります。これからも、カホンを通じて、森林について興味を持ってもらう人を、どんどん増やしたい、森から笑顔を届けたい！私の活動は、まだまだ続きます！

H30年度卒業生  
進路先：愛媛県美容専門学校